

「知っておきたい マルクス **資本論**」 神津朝夫（こうず あさお）著

・角川ソフィア文庫 2009年5月25日初版

## ※神津朝夫

・1953年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。在学中より、向坂逸郎氏に師事して『資本論』を学ぶ。大学院博士前期課程終了後ドイツ・マンハイム大学経済学部へ2年間遊学。

・外資系金融機関調査部、大学教員を経て、現在は著述業。

・論文に「『資本論』体系の成立を」めぐって一プラン問題への一視点」（「唯物史観」28号）など。茶道史関係の著書に『千利休の「わび」とはなにか』などがある。

## 【あとがきから一部】

・2007年は『資本論』第一巻の刊行140年だったので、それを機に大阪でも、同年秋から1年間の資本論入門講座が開かれることになった。

・私が若い頃お世話になった細川正氏（新社会党副書記長）から、20年以上ぶりに突然電話があり、その口座の講師を頼まれた。

・労農派の系譜に属する経済学者が、関西地方には今はほとんどいないのだ、という。

・私は学部学生・大学院生時代に、向坂逸郎先生のご自宅での通称「寺子屋」で『資本論』を読んでいた。

・毎週土曜日の研究会はほぼ皆勤し、先入観はもたずに『資本論』を読み込むこと、そして自分の頭で徹底的に考えることを教えられた。

・研究会が一段落したあとは、向坂先生の歴史や文化、芸術の雑談が楽しかった。向坂先生は、とても柔軟で教養の豊かな方だった。

・大学三年の秋、和氣誠氏に、向坂先生にご相談したいことがあると申し上げると、即座に「大学院のことですね。先生から、神津君がきつともうすぐ相談に来るから、大学院へ行きなさいと伝えてくださいと言づかっています。」といわれた。

・向坂先生のもとに出入りしながら、私は政治活動にはほとんど関わらず、研究会のなかでは浮いた存在だった。……。先生は温かく見守ってくださっていた。

・ソ連のアフガン侵略をきっかけに、私は向坂先生からも、その人脈からも距離を置くようになった。

・この15年ほどは、経済学からも離れて、日本文化史、茶道史の研究を専らとするようになった。

・しかし『資本論』についてなにか形のあるものをまとめることは、私にとっていつかは果たさねばならない義務だと、ずっと心の片隅で思っていた。……。

・あつという間の1年間の講座だった。……。

## 労働者の資本への従属

・マニュファクチュアは必然的に使用する労働者の数を増加させ、それに合わせて生産手段への投資を増大させる必要があった。それはマニュファクチュアの技術的性格から生じたことといえる。

・一方、労働者は、一面的・部分的な労働に特化された部分労働者になり、もはや独立できずに資本のもとでしか生産を行なえない存在となったのである。

・部分労働者になってしまうと、なにを作るか、そのためになにが必要かといった、その工場全体にとって必要な知識、洞察、意志が不要となり、それから分離されてしまうことになる。

・それどころか「無知は勤勉の母である」、つまり労働者は無知であるほうが望ましいと資本家の御用学者は書いている。

・また、国民を教育することは分業の法則に反するとも、書いた。

「一人の人間になぞらえて、頭の労働と手の労働があり、資本家が頭で、労働者が手である。」

国民一般はみんな手になればよいのであって、頭にならなくてよい。頭の労働と手の労働との分業は、社会が富めば富むほどますます明瞭となり、決定的となる。しかし政府が教育によってその分業を妨害し、この自然の進行を阻止してよいのであろうか。」という論法であった。

・そのことは、この時代に出現した経済学が、社会的分業とマニュファクチャの分業を区別できず、生産の量ないし価値の側面ばかりみていたことからわかる。

・彼らは労働者の部分化・一面化には無批判だった。

・しかし、プラトンをはじめギリシャ時代の著述家は、それとは対照的に社会的分業を質と使用価値の側面からみて、人間の才能が相応の活動領域を見いだすことで個人の能力が発展すると考えていたのである。

### マニュファクチャの限界

・とはいえ、マニュファクチャによる資本主義的生産には多方面の障害があった。

・マニュファクチャは単純な作業に従事する不熟練労働者を生み出したが、不熟練労働者はまだ生産の主体になっていなかった。

・生産の中心的な部分を担っていたのは、やはり熟練労働者だった。

・手工業的な熟練が必要であり、その熟練労働者が資本に対して抵抗すると、資本はどうしようもなかった。

・こうしたマニュファクチャの障害を取り除いたのがアークライトである、と資本の代弁者ユアは書いた。「アークライトが秩序をつくりだした。」

・アークライトは、いうまでもなくマニュファクチャの時代を終わらせた水力紡績機の発明者である。

・産業革命によってマニュファクチャの限界が打破され、機械制大工業に発展したのである。

・ところで、アークライトの水力紡績機にしても、あるいはそれと並ぶ重要な発明であるワットの蒸気機関にしても、そうした機械をだれが作ったのかというと、マニュファクチャが作ったことになる。

・マニュファクチャは、マニュファクチャ自身の製造物として機械を作ることで、自分自身の基盤を壊していくことになったのである。

・(マニュファクチャの時代は、「今は昔」だが) 大工業以前の労働はどうだったかを知らない、大工業の労働があたり前だと思ってしまう。

・今だとむしろ職人の世界を異質な世界だと感じてしまう。

・しかし、資本主義以前の何千年もの人間労働が、このマニュファクチャのなかで、まず変えられていった。そこで資本主義的な商品生産がはじまり、さらに機械が入ってきたのである。

・大工業以前のマニュファクチャから分析することによって、資本主義によって労働が変わりはじめたことがよくわかるのである。

## 労働大学通信教育講座 テキスト「政治・社会主義」

### 社会変革の歩みとはたらく者がめざす社会

ネットワーク労働大学 編

※画期となった二つの革命——産業革命と市民革命

・資本主義的生産は、資本家に雇われた労働者が、同じ作業場に集められて生産をおこなうマニュファクチャ（工場手工業）から始まった。

・マニュファクチャは、独立の手工業者が一人でやっていた仕事を多くの労働者が分担すること（分業）によって、生産力を大いに高めた。

・しかし生産の基礎はまだ手工業であり、規模も大きくはなかった。

・そして何より、生産が労働者の熟練に依拠していたため、資本家は、しばしば労働者の不服従に悩まされた。また、賃金も、資本家が十分な利潤を上げるには高すぎた。

・マニュファクチャ時代には、資本家はまだ、労働者を実質的に支配するには至らなかったのである。

・これに一大変革をもたらしたのが、18世紀後半のイギリスに始まる産業革命だった。

- ・産業革命は、第一に、大量生産を可能にし、商品経済を社会全体に押し広げた。
- ・第二に、手工業的熟練を廃して労働者を機械の付属物に変えることにより、資本家による生産の指揮を確立した。
- ・第三に、大量の失業者を生みだし、これをテコに、資本家が安定して利潤を上げられる範囲に賃金をコントロールできるようになった。
- ・こうして、産業革命を契機に、資本主義の経済的土台が確立したのである。

## 第5節 工場手工業の資本主義的性格

- ・工場手工業の出発点は、同じ資本の下に多数の労働者が集められるということである。
- ・工場手工業的分業は、使用労働者の増加を、必然のものとする。
- ・必要労働者数は、現存的分業において規定されている。
- ・分業による利益増のためには、それに見合う労働者数の増加がなされなければならない。
- ・このために資本は、可変的構成部分を増大させるとともに、不変的構成部分も増大させねばならない。建物、炉等のような共同的生産条件の大いさの増と、原料が増加されねばならない。
- ・原料の量は、(分業による労働の)生産力の増加と同じ割合で増加する。
- ・資本の最小限量の漸増(ぜんぞう＝だんだん増えること)と、社会的生活手段と生産手段への漸増的転化は、工場手工業の一法則である。

### 【309 頁後から 6 行目～】

- ・工場手工業における(機能しつつある)労働体は、資本の一存在形態である。
- ・(多数の個別的部分労働者から組み立てられた)社会的「生産機構」は、資本のものである。
- ・生産力は、資本の生産力として現われる。
- ・工場手工業は、労働者を資本の指揮と規律とに服せしめ、等級制約編成(?)を作り出す。
- ・(単純な)協業は、個々人の労働様式を変化させないが、工場手工業は、それ(個々人の労働様式)を根底から変革する。
- ・工場手工業は、労働者の局部的熟練を助長して、(手工業の親方＝熟練労働者と比べると)その労働様式を変形したのものとして、不完全形態なものにする。

### 【310 頁 3 行目～】

- ・特殊な部分労働が、各個人に割り当てられるだけです。なく、個人そのものが分割されるかのように、一部分労働へ割り当てられる。

### 【310 頁 6 行目～】

- ・労働者が労働力を資本に売るのは、手工業の親方＝熟練労働者と違って、商品生産が、自分一人ではできないからである。しかし、逆に、今や、彼の個別的労働力が、資本に売られないとすれば用をなさない＝商品が生産できないのである。(個別労働力が資本に売られ、資本家の作業場においてのみ、機能する。＝商品が生産される。)

[自分一人では商品生産ができないから、労働者は労働力を資本に売るのである。労働者が、自分一人で商品生産ができるのであれば、資本家に労働力を売らずとも自分で商品を生産し売れば良いのである。]

### 【310 頁 9 行目～】

- ・工場手工業労働者は、「独立したものを作る能力を奪われていて」、一人で商品の完成品までを作ることはできない。
- ・資本家の作業場の付属物としてのみ、生産活動を展開する。(工場の付属物として生産活動する。)
- ・「分業は、工場手工業労働者に資本の所有である旨の烙印を捺(お)す。」(分業は、工場手工業労働者に「資本の所有であることを」はっきりと、表し、示している。)
- ・「エホヴァの選民は、額にエホヴァの所有なることを記されている。」
- ・(エホバとは、「主[しゅ]」。神の名をみだりに唱えてはならないとして、神の名を呼ぶ代わりに「主」と呼ばれていた全能の創造主である。)
- ・神は、唯一神エホバ(ヤハウェ)であり、現代の世界は神に反逆した天使(「反逆者＝サタン」)の支配下にあり、やがて終わりの日にキリスト率いる神の軍団との大戦争(ハルマゲドン)によりサタンの支配を終わらせ、地球はパラダイスになる。その時、死んだ人たちも復活させ

られて、永遠に生きる機会を得る。(そのエホバから、復活させてもらえる確約を得た死んだ人たちが「選民」であり、額にエホバの烙印が捺されている?)

【311 頁 4 行目～】

- ・手工業者の知識、洞察、意志は、作業場においてしか必要とされない。
- ・手工業においては、生産上の能力は生産の場においてのみ拡大する。
- ・工場手工業においては、知識、洞察、意志は、資本に集積される。
- ・工場手工業的分業は、生産能力を資本の所有とし、支配のための権力となり、労働者と対立させる。
- ・これは、単純な協業から始まり、部分労働の工場手工業で発展し、大工業において完結する。

【312 頁 1 行目～】

- ・工場手工業においては、社会的生産力の増加は、労働者の個別的生産諸力の低下により制約される。〔労働者の個別的生産諸力の低下は、社会的生産力の低下となる。〕
  - ・工場手工業が繁栄するのは、人が意志をなくし、人間が一つの機械となる場合である。
  - ・実態として、ある単純作業では意志を持たされず、労働者が使用された。
- < 何で俺がこんな単純作業をしなければならないのか、というような意志か? >
- ・「18 世紀の中頃、ある種の、単純で、秘密をなす作業には、好んで使用された。」
- < 雪印のコーヒ牛乳の消費期限の改ざんの例のように? >
- ・アダム・スミス (イギリスの経済学者。「経済学の父」と呼ばれる。主著『国富論』) は言う。「単純作業をなすに、彼の知性を行使しない。愚鈍無知となる。」と。〔部分労働者が鈍感となる、と。〕
  - ・「彼の仕事の手練は、彼の知的徳性を犠牲にして獲得されたように見える。〔単純作業・単純労働に従事する労働者は、その者の知識等をなくすことによって得られるように見える。〕」「これは、産業の発達した文明社会では、労働貧民＝人民の大多数が陥らざるをえない状態なのである。」と言う。

- ・この防止のため、アダム・スミスは国家による国民教育を推奨する。
- ・アダム・スミスのフランス語訳者は、国民教育は分業の一つの法則に反するものであり、国民教育により「資本家たちの全社会的制度〔無知で、単純作業・単純労働をさせることができる労働者を得ることができるという仕組み?〕が否定される。」と、反対する。さらには、「分業を妨害・阻止してはならない。」「労働の分離ではなく、混合のために、(工場手工業的分業ではなく、手工業的商品生産とするために) 政府が国庫収入を支出してはならない。」と。

【314 頁 8 行目～】

- ・分業の、精神・身体への影響は、生命の根本をとらえ、産業病理学へも寄与する。  
〔第 8 章で述べられている、児童の過酷な労働、長時間労働、労働環境の劣悪な状態が労働者へ与える影響のこと等か?〕

【315 頁 10 行目～】

- ・分業に基づく協業、工場手工業は、自然発生的に形成されるが、広汎となると (範囲がひろくなると)、意識的、計画的、体系的な形態となる。それは、固守される。
- ・この形態の変化は、労働用具の革命による。
- ・近代的な工場手工業は (例えば、被服工場手工業は)、分散しているものを集めれば良い。
- ・手工業的生産の種々の作業 (例えば、製本業) は、特別の労働者に専属させられており、分業の原理がきわめて明白である。
- ・必要な労働者の比例数を見出すのに、時間は要しない。

【316 頁後から 7 行目～】

- ・工場手工業的分業は、手工業作業の分解、労働用具の特殊化、部分労働者を作り、これを配列・結合・組織化し、生産力を発展させる。
- ・資本主義的形態としては、相対的剰余価値を産み出すための、資本の自己増殖を高めるための、一方法にすぎない。
- ・これは、搾取の手段として現われるのである。

【317 頁 5 行目～】

- ・この時の経済学としては、工場手工業的分業は、「同量の労働をもって、より多くの商品を生産するためのもの、商品を低廉化し、資本の蓄積を促進するための手段」として考察する。
- ・この量と交換価値に反して、古典的古代の著述家たちは質と使用価値に固執する。

- ・生産部門の分離→商品は優良につくられる。生産物は分業によって改善される。
- ・生産物量の増加については、使用価値が豊富と言われるが、交換価値や商品の低廉化については述べられない。

【321 頁後から 5 行目～】

- ・工場手工業が支配形態だった時代には、熟練労働者と不熟練労働者では、熟練労働者が優先され、不熟練労働者の数は制限されている。
- ・工場手工業は、婦人と児童を生産活動へ向かわせるが、このことは、熟練労働者優先の習慣と男子労働者の優先という抵抗のために阻止される。
- ・分業が進められても、比較的困難な細部労働には依然として比較的長い修業期間が必要であり、そうした労働者により手工業的熟練作業が維持される。(イギリスでは、7年の修業期間を規定する徒弟法が、工場手工業時代の終末まで効力を持ち、大工業によって初めて廃棄された。)
- ・依然として、手工業的熟練が工場手工業の基礎であり、資本は熟練労働者の抵抗と闘わなければならない。
- ・ユアは言う。「労働者は熟練するほど、わがままで、取扱いにくくなり、資本主義的生産に重大な損害を与える。」と。

【323 頁 8 行目～】

- ・工場手工業は、都市の手工業と農村の家内工業を基礎としたが、工場手工業の発展により、その生産のために求められるものとの間が矛盾するに至った。[工場手工業は、都市の手工業と農村の家内工業を基礎としたが、工場手工業の発展により、都市の手工業と農村の家内工業の間に、矛盾・問題が生じてきた。]
- ・工場手工業によって作り出された完成されたものの一つは、労働用具そのものを生産するための、複雑な機械的装置を生産するための作業場だった。[工場手工業は、複雑な機械的装置をも生産し、労働用具そのものを生産した。]
- ・ユアは言う。「この作業場は、分業を示している。錐(きり)、のみ、旋盤は、それ自身に対応した熟練度の労働者を対置させた。」[仏語訳版の訳では、「やすりや、きりや、旋盤には、それぞれ、熟練の等級に応じた労働者がついていた。』
- ・工場手工業的分業の作業場が生産したのは機械である。機械は、社会的生産の手工業的活動を否定し、発展させ、押し上げた。
- ・機械の生産は、一方では、部分生産活動に労働者を拘束する理由を取り除き [この部分の作業につく単純作業労働者を不要としたり? ]、他方では、部分生産活動に資本の支配を阻害する要因もなくした。[熟練労働者を配置せずとも、不熟練労働者を配置すれば良い、もしくは、配置されるべき労働者をも不要とした? ]